

兩極端を合して是を一にし、更らに彼を此に入れんとするは、

とは何を意味するかと問はゞ、即ち平等的の文學と差別的の國家とを、第一、第二、或は第三の如き場合となさんとするを云ふ。而して、第一と第三とは實際存在し得ざれば、特に第二の如き場合、文學と國家とを合して一圓とし文學を國家のこの爲に作爲せんとするを云へるなる平等的の者（主人は差別的なりと云ふ、予は後に其然らざるを駁せむ）を差別的の者となす、是れ豈に不合理、不自然の計畫に非ずや。是豈に文學の特性を没却し去るものに非ずや。既に然らば

呆然一驚を喫せざるものあらんや、

と、Emphasize するとも何の不可ある可き。是れ豈當然なる言葉に非ずや。主人が予の最弱點とせる處も既に此の如し。亦何ぞ文學と國家とは分離すべしなどの法外無鐵砲の論を爲さんや。楮材學人には、前後の差別なし、特更に重卷點を以て標識し玉ふの必要なし。予は足下の如く、文學は國家に後

れて生ずなど云ふものに非るなり。要するに予は文學を平等的なりとし、國家を差別的なりとす。相關係する所あるは勿論なれども、平等的を差別的に引落し、以て、文學を國家のこの爲めに作爲せんとする現時の國家主義者を非難す。是を以て、文學國家分離論者なりと云ふは固より予を誣るの、言なり。果して然らば、文學は平等的なるか、亦理想を踏臺とするか、是れ予が次に論せんと欲するものなり。蓋し、予が根據も此に存し、睨天窟主人の駁撃點も茲にあればなり。

（未完）

雜報

○修辭立誠

錦心繡腸にあらすんば、何を以て鏗鏘絢爛の藻

を流かんや、器識深遠にあらすんば、何を以て卓犖恢奇の見を攄へんや、同人等材庸にして識暗、倥侗にして顛蒙、固より筆硯の資に非ず、謬て諸君の推す所と爲り、任を雜誌部委員に受け、之を先輩に紹て、之を後進に貽さんとす、鸞鳳鳥鵲、

金玉瓦石、顧て鳥を能く蹶踏、媿汗せざらんや、然れども既に其任に當る、敢て欸々の愚を效して諸君の清矚に副んことを期す、諸君も亦宜く瓊瑤の資に振て、相與に鼓吹して而して之を羽翼すべし、是れ同人等逸を取るに非ず、獨り校誌の素懷を憫むのみ、試に見よ、六百の校友晴晨雨夕相見ざるの日なしと雖、一堂の下胸襟を披て懷抱を談するの機に至りては果して幾許かこれある、縦ひ離群索居規切無聞の憾なきも、亦豈友朋盍簪切悃砥礪えて一大校風の感化をなす所以ならんや、龍南會の起て、演說部雜誌部の設けられしもの職として此に是れ因るに非ずや、若し單に雕蟲篆刻して巧に浮藻を聯ね、抑揚俯仰して妙に絳脣を轉するを以て其の能事と爲す者あらば、同人等斷じて其の可なるを知らざる也、而るに諸君の謙讓なる、内には學殖の深淵を蓄へ、外には天口を折き雕龍を擅にするの技を有まながら、尙空く光を韜み言を遜りて、萬丈の光燄を吐くに躊躇するものあるが如きは抑何の心ぞや、同人等の私かに怪む所、其れ或は多言の誠に慮る所あるか、蓋し聞く、氣浮なれば則ち言多く、

志輕ければ則ち言多し、多言の卑むべき固より論を竣たず、然れども黙なるもの必ず尊む可しと爲す乎、疑て問ふを知らず、蔽て辨するを知らず、冥然以て自ら罔するも黙なり、言ざるを以て人を餌るも黙なり、人の其長短を覘ふを慮り、揜覆して以て黙と爲すも黙なり、深く之が情を爲し、厚く之か貌を爲し、淵毒阱狼、自ら黙に托して以て其の奸を售るも黙なり、默豈必ずしも尊ふ可けんや、設令ひ默をして悉く尊む可く、言をして悉く卑む可からまむるも、我誌の神聖なる、世間名利の溷濁を以て律す可からざるものあり、此に纏々千萬言を累るも、誰れか名利の爲とせんや、況んや之を讀む者は、連齒の學友に非ずんば、則ち啓蒙の嚴師なり、師は吾を誨へ、友は吾を勸む、之か陶冶の力に頼り、之か切磋の功を承け、駉々として學に進むは眞に學者の至願に非ずや、何爲れど其れ黙々とて已む可けんや、言ふ可し、言ふ可し、大に言ふ可ま、論說に文苑に、批評に、雜錄に、須く潮湧濤典の筆を振て、其底蘊を展盡す可し、庶幾くは灑澤切劘の實を擧て校誌の素裏を全うするを得んか、司人等既に

犬馬の勞を分とす、縦ひ藻思鴻章を属するの資なきも、尙ほ能く巖を搜り藪を剔き、務めて我核友の雄作鉅製を介せん、然れども同人の勞をして其効あらしむるものは、諸君の自奮に待たずえて何ぞ、若夫れ大に言て而も多言の誠を守るは自ら其の道あらん、易に曰く修辭立其誠と、請ふ相與に此語を以て事に従はん、

○新學期

龍山の春方に濃かなるの頃、一週の休暇は忽ちにして去り、第三學期は新まき風手を以て來れり。思ふに此春期休業は最も短く去て、而も最も有益に費されたるものゝ一なりき。或はポートに畫湖の波を蹴盡して、海國男兒の豪骨を練りたる勇士あり。或は鐵脚名山大澤を踏破去て、自然雄大の靈光に浴したる高士もあらん。時に或は青苔孤墳を埋むるの邊、英雄の事業を追懷し、或は青蕪茫茫の間に義臣の戰没を吊し、家庭に入りては飄々の和氣に包まれ、舊知に面しては懷抱を談じ、時に幽窓詩卷を繙て、天地の美に感じ、或ハ月夕死友と天下の經綸を談じ、其快其益

定て大なりしならん。此間養ひ得たる耐氣權臨の精神と、英氣充實の体力とを以て此新學期を迎ふ。如今諸士の精勵刮目看る可きもの有らむ。

○端艇部春期競漕 (劃磨子投)

瞥然飛んで過ぐ誰が家の燕ぞ、暮地吹き來る何の處の花ぞ。春光臨蕩、烟波杳々、東風拭ひ去る漾々たる江水の面、白鷗閑に眠る激漉たる碧波の間。さなさに壯心勃々たる吾端艇部の健兒、豊空しく此好機を逸して、徒に懶眠を食ることせんや。春期競漕の番組此時に際して揭示せられぬ。英氣愈振ひ、鐵腕頻に鳴て止まず。

試業既に終んぬ。胸襟爽然、日々里餘の經路を踏破し、短褐輕裝、腰辨當を提けて練習に赴くもの引きも切らず。降り去ざる雨をも辭せず、吹きささむ風をも厭はず。特に各部の撰手諸君は、寓を湖畔の家に卜し、起臥飲食を節し、寤寐の間は破らくも其任を忘れず。晨には決漉たる曉霧を破りてオイルの端に銀波を碎き、夕には朦朧たる暮靄を穿て、ヘビーの聲に水禽を驚かし、雲間未だ消えざる星光を望んで、山端既に没する鳥影

を送り、努めたりや桂の冠を戴かんとて。されば同窓の有志は物を贈て其辛勞を慰ひ、志を寄せて其の奮勵を囑す。責任いよく重くして覺悟益銳く、編笠の徘徊絶ゆる暇なく、顔頬風雨に暴されて其色宛から銅に似たり。

斯くて四月十二日は來りぬ。一天清澄、微風習々落英を翻へし、細漣滌々岸を嚼んで聲あり。彩旗例によりて翻々たる處、參觀の和船既に集りて航路の一測に連り、畫湖の風趣自ら一段の壯景を加へぬ。競^二は午前九時半といふに始まりぬ。輕裝の健兒艇を曠^一てスタートの邊に集るとき、活氣天を貫き、雄風當る可からず。回数總て十六、今試に其概況を記せん。間々評言を加ふるは、多く之を斯道の名士に承く、責の在る所に至りては、われ素より之に當るを辭せず。唯恐る、觀察精細ならずして記述或は杜選の譏を免れざらむ。僭越の罪はわれ實に甘んじて之を受くべし、唯偏に諒恕を請ふのみ。概評するに、當日の競漕皆壯快ならざるなく、各艇の差亦甚だ多からず、之を進水式の當時に比するに、進歩の度見るべきものあり。午後に至りては風威頗る加は

り、舵手の苦心一層を加へぬ、各艇多く其方向を傾けられしは、蓋し是が爲めなるなからんや。航路に就きては第一最も不利、十五回の競漕中、此航路を取て勝利を獲たるもの唯纔に一回に過ぎず。潮流の勢夫れ止むを得ざるか。總てスタートは踟躕の狀ありしが如く、見し^一わが僻目か。いでや進んで各回の狀況を録せん。(順番は番組表に據る)

第一回は二艇の競漕なり、赤は航路二、黄は三。スタートにては赤よかりしかど、中途に及びて黄の進行頗る盛に、赤の櫂は常に乱れがらにて、あはや黄に先を占められんとす。赤の舵手大喝^一て漕手を勵まし。先づ回航を終りたれども、漕手既に疲れたりげに見ゆ。されど先制の勢動かし難く、遂に赤の勝利に歸したり。第二回も亦二艇の競漕なり、赤ハ一、黄は二。スタートにはいづれ優劣なく、初の程は何れを先きとも分け難かりき。赤のピッチは急に過ぎ、青のは寧ろ緩に過ぎたり。回航に於ては赤早く、歸途將に半ならんとするの頃、黄の勢遽に加はり、殆んど赤を抜がんとす。赤はあせりて後れじと努め、二艇頂

を並べて猛進す。頗る目覺しき競漕なりしが、遂に二三尺餘の差を以て赤の勝に歸したり。第三回も亦二艇競漕なり、青は二、赤は三、スタートに於て用意と發砲との間餘に近かりし故に、兩艇漕手の準備未だ整はず、艇の方向未だ定まらざりしやうなり。當初三四本全くピッチの整はざりしは蓋し其ためなるべし。青の二番は第一本の擢にて倒れ、五六本目迄全く漕かず。兩艇共にピッチは常に亂れがちなり。回航は赤疾く、歸途中に至るまで青の擢亂れて名狀す可からず。赤の舵手此機を外さず、一意漕手を勵まさんとにのみ勉めて、目標を見るに違わらざりけん。漸次二の航路に傾き、將に青にフアツルせんとす。是斷じて舵手の不注意といはざるべからず、されど、兩艇漕手の力不平均なりしにも由りしなるべし。遂に勝は青の占むる所となれり。第四回、青は一、黄は二、赤は三。スタートに於ては青最も先し、赤之に次ぐ。半途に及んで青後るゝこと凡そ二艇身、回航に至りては赤黃殆ど前後なく、歸路三分二に至る比ひ、青はへびを令えて躍進し、殆んど前二艇を抜きしと雖も、最後のへび

にて赤の力最も強く、遂に第一着を占めたりき。第五回、赤一、青二、黄三。三艇一齊に發し、ゴールに達するまでは赤最先に進みしが、回航に至りて最も遅れ、他の二艇に後るゝこと二艇身に及ぶ。赤頻りにへびを加へしも其効なく、青黄二艇は相並んで先登を争ひ、遂に半艇身の差を以て黄の勝となりぬ。第六回、赤一、青二、黄三。スタートに於ては大差なく、回航に際して黄の整調の擢、如何なる機みかボツキと折れぬ。是より二艇の競漕となり、赤は漸次其速力を加へ、其の航路の不利なるにも係らず、常に青を後にして進みぬ。青はいらだちて頻にへびを加へ、漸く之に追及せざかど、遂に三尺許の差を以て赤の第一着に了んぬ。第七回、黄一、青二、赤三。是實に各部第一第二撰手より混成せられたる組なり。スタートは殆んど其差なく、ゴールに到る頃、三艘殆んど並行え、悠々迫らず。赤回航に於て最も先じたりしが、三分一を進むに及んで青既に赤を抜き、赤黄の漕手は較々疲れたりげにぞ見えし。三分の二に及ぶ比はひ、三艇全時にへびを令し、全力を竭えて突進す。眞先なるは赤

なり、次なるは青なり、又其次なるは黄なり。三艇遂に此順序を保ちて決勝線に入る、其差僅に半艇身に満たず。第八回、赤二、青三。兩艇發するどき殆んど全時。回航に至りて青少しく後れ、歸路半に至るまでハ赤尙先じたり。決勝線に近きて赤青にファウルせんどす。青機を見て躍進し、半艇身餘の差を以て勝を占めたり。第九回、青二、黄三。青先つ發す。回航も亦青疾かりき。青のピッチハ急に過ぎ、黄のは緩に過ぎたるの感あり。兩艇相距ること終始一艇身許、青の漕手は漸く疲憊せりげなり。歸路三分一に及ぶ頃はひ、黄のヘビー頗る善く利き、疾驅青を抜かんとして能はず。若し航路にして尙少しく長からんには、其結果或は測るべからず。第十回、赤一、青二、黄三。赤黄同時に發して青少しく後れたり。ゴールに達する頃、青最も先じ、黄殆んど之に迫り、赤頗る遅れたり。回航は青最も早く之を畢へ常に一艇身餘の差を保ちて黄に先ず。黄は熱意奮激、頗るあせりて追及せんとしたれども遂に能はず第十一、第十二の二回は都合あつて流れとなり、直に第十三回職員競漕に移る。赤二、青三。曩

に進水式の際、餘興競漕の中、職員競漕の事あり。或や、職員諸君の意氣頗る旺に、氣焰殆んど一萬丈に及びぬ。今回に至りては其英氣愈鋭く、氣焰高く騰りて殆んど十萬丈を越ゆ。焉んぞスタートに於ては赤よかりしが、回航後半途に至る頃には青既に先じ、それより常に半艇身の差を保ちて進み、今や二三本にて決勝線に入らんとするまで、青尙先を占めたり。赤はヤツキとなりて追ひ抜がんとし、舵手頗に整調を助けて爰を先途と躍進一番、僅に二三本にて見事に青を凌ぎ、二尺餘の差を以て勝を占めたり、其れ手際誠に敬服の外なし。當日の競漕中、實に觀物の一たるを失はず。第十四回、青一、赤二、黄三。發程にはさしたる差なく、ゴールに至るまでは赤眞先に進みぬ。回航に當りて黄これに及び、殆んど並行して進めり。青の三番は腹を切り、擡を外玄、爲に頗る遅れぬ。三分二に至る頃、赤勢を増して抜きかけたりしも、風勢のために方向少しく傾き、遂に半艇身弱の差を以て黄の勝となりぬ。第十五回。黄一、青二、赤三。三艇一齊に發し、中途までは、青先んせしかる、回航に至りて背塵凡、赤

は鏡氣を得て突進し、難なく勝を占めたり。第十六回。黄二、青三。中途に於て青の舵折れて用をなさず。記すべきこともなくして黄の勝に歸せぬ。

忽ち見る、岸上の同志頗りに東奔西走するを。或は舟に乗せて航路を護り、或は岸に踞して白布を振り、以て聲援を爲さんとす。あはれ、撰手の競争將に初まらんとするなり。撰手諸子句餘の練習に腕を練り氣を養ひ、威風凜々、各彩帽を被りて出づ。同窓の心悸昂進せざるに非ず。

第二撰手の氏名は實に左の如し。

一部	青	山本	稻垣	久保	湯淺	持永	龍田	一
二部	赤	岩佐正	田島	野中	岩佐尙	荻原	金峰	二
三部	黄	榎葉	岸川	住田	小川龍	山口	花陵	三

三艇相並で發程線に上る、二部の撰手何の意か盡く白の鉢巻に景氣を添へ、觀るものをして物々まき扮装に驚かしめぬ。

忽ち聞く號砲の聲。三艇矢の如く進めり。スタートは青黄幾分か早やく、赤は艇軸少まき歪みたりしか如え。左れを半途に至りて二艇に追及ひぬ。三艇相並び、ゴールに至りし頃は赤既に二

三尺を抜きぬ

赤の回航最も早やく、黄之に次ぎ、青少しく遅く。赤と黄と整調の位置を異にし、反對の方向に回航せ、兩航相接してあなや將にファウルせんとす。見るもの覺へず掌裡汗を握らざるなし。青のピッチ頗る悠々、其航路最も不利を占む。漸く決勝線に近き、必死を期えて漕ぎあせりしも遂に及ばず。決勝線に及んでは赤先つ着し、黄之れに次ぐ。

陸上の喝采は愈高し。

二部の第二撰手既に勝を占めて去る、今や餘す所は第一撰手の競漕のみ。岸上の奔走は愈加りぬ、喝采の聲は益起りぬ。三艇先後發程線に上るや、水陸聲なく、睜目屏息して視る。正に是れ驟雨至らんとして風樓に滿つるの觀。

責任を雙肩に荷ふて各部を代表するものは誰ぞ試に其氏名を點呼せんか。

一部	青	龍野	五十嵐	竹崎	川崎	三宅覺	龍田	一
二部	赤	原	長屋	武下	頼尊	相良	金峰	二
三部	黄	國澤	三原	岩崎	北村	宇野	花陵	三

二部の撰手は例に依りて白鉢巻に身を扮し、一

部三部は悠然之に對して各其部を辱かしめさらんことを期え、各艇の健兒皆任を思ふて寧ろ沈み勝なり。

俄然擊鉄は引かれたり、三艇衝出されたる如く突進しぬ。スタートに於ては赤少しく先んしたり。中途に及んで赤少しく遅れぬ。青黃のヒツチ殆んど同じく、赤最も緩。忽ちにして、忽ちにして回航、赤先つ回り、他二艇之に次ぐ。然も三艇相並び、殆んど其甲乙を見ず。青は復た第一の航路を取りて、最も不利の位置を占め、少しく二艇に後る。赤漸く進み、黃殆んど之に追及せんとす。赤は抜がれまじとあせり、黃は今にも漕ぎ抜がんとす。黃と云ひ赤と云ひ青といひ聲援の聲湧くが如し最後に及び赤のへび一願る功を奏して凡そ一艇身の差を以て其勝に歸しぬ。折しも日は片雲の間を漏れて光を細澁の間に投げ風は彩旗の端を撫て、颯々として歌ふ歡呼喝采颯りに起り、靄湖の風色笑て當日の勝利を祝する顔なり。

第一第二共に二部の占むる所となる壯なるかな
二部生諸君

然れども、嗚呼然れども、驕るもの久しからず、盛なるもの必ず衰ふ。池塘の春草長に縁ならず、階前の、梧桐豈に秋聲の嘆なからむや。思ふ勝敗天に關すること多し、時に利と不利とあるは寔に免る可からざるの數のみ。勝者必ずしも永久に勝を占むべきに非ず、纔に一春秋、桂冠また何人の手に移らんか知る可からず、白の鉢卷何ぞ必ずしも盛運に値せんや。

競漕既に畢る。湖邊の人影全く散し、江水漫々、旗旒翻々たる處、暮靄四山を纏ふて、鳥影樹梢に懸り、晚風岸柳を吹いて、楊花片々波間に落つ。

○諸講師來任

夏目金之助氏。吾校の英文學に於ける佐久間教授あり。吾人竊に以て相誇れり。而して今夏日文學士の來任に會す。吾人は本校の爲に其人を得たるを喜ぶ。願はくば吾校の爲に、又た斯道の爲めに、各その特長を發揮して、吾校をして他校の後に瞻若することなく、またこれを學ぶものをして其の望を滿たしめ、以て斯道に大に盡せんことを。

加藤晴比古氏。湯原教授宮崎尋中に轉せられ、其後任とてドクトル加藤氏來らる。聞く氏は理財、公法論理心理を獨逸某々の大學に學ぶと思ふに今後、法學に文學に吾人の益する所多からん。吾人は氏の大に吾校の爲めに盡されんことを望むものなり。

鶴田祿四郎氏。本校生の業を卒へて大學に入り、學名ありて本校に聘せらる。その榮や亦大なり。吾人先には武藤教授を見、今又た鶴田理學士を迎ふ。吾人何ぞ欣喜に堪へざらんや。懇切なる教授、嚴格なる薰陶の外、先進の務に至ては、殊に本校に縁故ある兩先生に望まざるを得ざるなり。

○新世話掛

事務の多端にして、而も重要なること世話掛の如きはなし。吾人は滿校の諸士が、多務の人を去て益多忙ならしむる如きことなきを望むと同時に、世話掛諸君の一層公衆の爲に勉められんことを希望に堪へざるなり。先般委員の改選と共に、新に依頼せられたる世話掛諸君の氏名は左

の如し

法三	北原友二	文二	小林吉人	文一	松原常興
文三	松原基礎	二二甲	岩佐正雄	二一甲	船橋正心
工三	仲村幾夫	全乙	石坂二郎	全乙	森川莊吉
理農三	吉川岩喜	三二	河村信	三一	松村謙造
法二甲	井島義雄	法一甲	上村武尙	豫二甲	戸次正
全二乙	陳内惣三郎	全乙	楠田義任	全乙	辛嶋格

○役員會議

會計主任仙川氏の微恙の故に、少しく延期したりし役員會議は、去る廿日を以て開かれたり。例により本年度の豫算を議す。各部委員は務めて已れの部費を増さんと云、總務は可及的之を減せんとす。過去に徴せ、現在に照し、未來に考へ、必を取り、冗を省き、均を守り、熟議可決せる結果左の如之

明治廿九年度龍南會收入支出豫算

收入豫算總額	一〇三、一〇八五
區分	支出豫算
雜誌演說部	四九四、〇〇〇
擊劍部	一〇六、〇〇〇
柔道部	一〇〇、〇〇〇
弓術部	五三、〇〇〇
運動部	八四、七〇〇
無所属	一九三、三八五

右終つて來る九月よりの新入會者にハ入會費金拾錢宛を課することに議決せり

○文庫の整理

湯の滄かならんことを欲して、百人之を揚ぐも、一人之を炊かば何の益かあらんや、整理の難くまて紊亂の易き、甞に百と一との比に非ず、少きを以て難きに當り、多きを以て易に従ふ、物の整理せざる、是れ誰の罪ぞ、文庫の整理に至りては、從來委員等の苦心せし所、敢て其勞を厭ふに非ずと雖、奈何せん隨て整理すれば隨て紊亂し、今や之が整理を望むの難きは、湯滄を望むの難きよりも難からんとす、文庫の命數も其れ此に窮せるか、然れ共委員等閑に同窓の利便を稽討し來らば、豈に此が困難の爲めに我文庫を没鎖するに忍びんや、因て新に閱覽規約を設けて、更に之が整理を圖らんとす、諸君も亦た宜く深く省察を加ふ可し、履行を強ゆるの權能なきに乗じて、之が規約を蹂躪するは丈夫の恥つる所に非ずや、

雜誌部文庫圖書閱覽規約

- 第一條 龍雨會々員は、此の規約に遵ふて、雜誌部文庫の藏書を借覽し、之を室外に持出、ことを得、
- 第二條 文庫の藏書を借覽せんを欲する者は、其旨委員に申出で、文庫備付の帳簿の適當の欄内に、借覽せんとする書名、并に借覽期限、及び各自の姓名を記入すへき事、
- 第三條 借覽の圖書を返還するときは、其都度必ず委員の證印を請求すへき事、
- 第四條 一人一度に借覽し得る圖書の數は三部以下とし、借覽期限は長くも一週間を過ぐ可からず、タトヒ期限内に雖、使用を了らば速に返還すへき事、

○森寺綏來君を吊す

四月十七日、校友森寺綏來君病んで熊本病院に逝きましぬ、あはれ花は落つるもまた開くの時あり、月は虧ぐるもなほ盈つるの期あり、君一たび去て音容復た何の時にか接せん、月の初め江津の湖畔に、君か蕩漿の技を觀しもの、たれか一旬の後ち、芝焚蕙摧の歎、空く君を哭するの日あるを想はんや、あはれこの悲さを何にか譬へん、謹んで吊ふ、

○修學旅行券に就て (望藤生投)

吾人の切に望む所は全國の鐵道會社に運賃割引

を照會せられんことにあり、今や我核に學ぶもの其區域の廣さ、又前日の比にあらざる、然るに現今に於ては、僅うに日本郵船、關西同盟汽船、九州鐵道、等の諸會社に於て其運賃の割引をなせるのみ、これ只だ九州諸國を旅行するものに於てや、益あるも、長期休業たる夏季休暇に於ては、同窓の諸友は必ずや中國四國北海道等にも旅行を企つる人多からん、故に若し此休暇前に於て、當局者諸君出來得る丈の盡力を以て、全國鐵道會社に運賃割引を照會されなば、諸會社は必ず相當の割引をなさん、況んや各鐵道會社の運賃、一昨年來大に騰貴せるに於てや、又た況んや他の諸學校に於ても此の特典あるに於てや、若し當局者諸君の照會に依て諸會社が割引を承諾せば、これが吾人の旅行中に與ふる便益は實に尠少にあらざるなり、切に當局者に望む。

○柳絮紛々

●●●●●
生蕃攝影 會友松本喜四雄君、陸軍通譯を以て臺灣總督府にあり、頃ろ生蕃の攝影一葉を寄せらる、所謂萬山叢棘の中に、蛇虺蝮蠱毒瘴癘と

與に居るもの、兇怪の村類、一人をして單慟せしむ、然れ共王化普く及ぶ所、彼等を化えて輝々輝々の民たらしむ、近く一紀を出でし、之を想へば徐に又た一掬哀憫の情なき能はず、圖は掲げて新聞縦覽室に在り、

●●●●●
炊事委員 去る十六日 習學寮第三學期の自炊委員を互撰せり、撰に當りしもの委員長に陣内惣三郎君、購入長に清水孝藏君、保管長に柴田益太郎君なり、梁肉に飽くハ寮生の必ず望む所に非ずと雖、食器几案の濟楚に至りては、此際一層の注意あらんことを望む、

●●●●●
會友洋行 工學士三根正亮君、官命を以て米國に出張せらる、留別の書狀あり左に、

拜啓小生儀此度米國へ出張被命來る四月廿四日午前七時三十分新橋停車場出發仕候勿卒の際に候へば略儀以端書御暇乞
申上候草々

●●●●●
會友訃音 三根工學士壯遊程を趁ふ將さに近にあらんとて、理學士值賀威一郎君獨り幽冥の途に向へり、悲きかな、四月四日東京丸岡平造宗像十郎兩氏より、之か通報に接せり、掲げて以て消息に代へ併せて之を吊す、

拜呈仕候備て值賀君前月十三四日よりインフルエンザにて病

臥有之廿三日より入院の處チナスに成り心臓病加リ卅日午後六時逝去卅一日午後日暮里火葬場にて葬式有之候間不取敢右御報知申上候也、

体操副科 四月十七日學校揭示云々、自今体操副科を以て悉く正科に準せしむと、至れる哉用意、因に記す、擊劍部ハ此際袋竹刀を廢して、専ら長竹刀を用ふると云ふ、

圖書寄贈 在農科大學會友田口晋吉君、臨淵言行錄一部を雜誌部文庫に寄贈せらる、友人足立丈次郎氏之を杉浦天台先生に獲たるもの、更に之を足立氏に獲て貴會に寄すと、茲に謹んで其高意を謝し、併せて其由來を記して以て君の志を成すと云爾、

活力試験 四月廿日より活力試験の施行あり、其成績は異日之を報せん、

士官候補生 事少々く舊聞に屬すれども、二部一年和田清造、舊豫科生加藤秀治兩氏ハ過二月下旬陸軍士官候補生に合格し、和田氏は第四師團に、加藤氏は第六師團に、何れも入營したり。

兩氏よ他日千軍萬馬の間に、馳騁するの日我校に於て養ひ得たる氣象を發揮することを忘るゝカシ。

中川學校長 ハ視察の爲め、長崎醫學部へ出張せられ、去る十八日歸校ありしが、再び學校長會議へ列席の爲め去る二十五日上京の途に就かれたり。

細川侯爵 先般佛國留學より歸朝せられたる細川侯爵には、去廿二日來校せられ、懇ろに各級授業を觀覽せられたり。

大分縣師範學校生 去廿四日同校生徒數十名ハ修學旅行の途次來校したり。

比較解剖學講義 本校内、朝夕課業の餘暇、博物室の中に在つて、圖書を右に之「ミクロスコップ」を左にし、孜孜矻々として倦むことを知らず、一身を以て科學の研究に任じ、敢て他を顧みざるの士を中川教授となす。教授の研究に熱心なる全校人士の深知する所。今又聞く、既に動植

大略の研究實驗を終りて、又三部生(二年)の爲めに前月末より比較解剖學を講せらるゝと。吾人は三部生の爲に深く之を感謝すると共に、教授の益々健康にして、以て愈斯學の爲に盡されんことを望むものなり。

中川學校長 會之長 二日長 二日長 二日長 二日長

城にあり。四月十四日の漢城新報記して曰く

加藤外交官試補の受賞、我が公使館附外交官試補加藤本四郎氏は特別勤勉の廉を以て、此程外務省より若干金を賞賜せられたり。

吾人は氏の益々健在ならんことを望むと同時に、益々國家の爲に盡力せられんことを望む。

演說會 本月廿五日例によりて演說會を瑞邦館に開く。餘興として琵琶あり。その景況ハ之を次號に記さん。

同朋雜誌

今や全國の六高等學校、皆機關雜誌を有せり、之を欠けるもの獨り山口高等學校あるのみ、第一に校友會雜誌ある、第二に尙志會雜誌ある、北陸と薩南とに、北辰會雜誌と學友會雜誌とある、猶ほ我校に龍南會雜誌あるがこと玄、思藻氣魄談理感慨趣は同しならずと雖、孰れか健兒の面目にあらざらん、眞に昌世の美觀なり、惟憾むらくは各々地の一角を割て之に據り、相與に轡を駢べて一塲に馳騁上下するに由なきのみ、然れ共

今や明世の雁足は、全國同朋の消息を讀すに數日を出でじ、之を披て我同窓に介するは、吾輩雜誌部委員の任にあらすとせんや、同胞雜誌の欄を開く、

校友會雜誌第五十四號

風俗時と興に移る況んや人を、武撲剛健の風日に消磨して、脂騰澳涿の習漸く人寰を一掃せんすと、また都鄙を別たす、頭を回せば武香陸頭の健兒、如何か今昔の感を結ぶらん、排外一步皆敵なり、孤城に退嬰して蕩乎たる頹風に反抗せし、慷慨悲憤の時代は既に過ぎ去り、一轉して此の間に養ひ得たる志氣は、健兒をして意氣軒昂、轉

た一齊に進撃移風の曲を高唱せしめ、余弊の致す所再轉して、今や又た龍城の聲漸く高まり慷慨悲憤の當年を髣髴せしめんとするに似たり、一正一反一高一低、外移れば則ち其内も變ぜざるを得ぞ、知らず外に徇ふて其内を變ぜざるもの、果して何の策かある、學制の變更、競争試験の全廢、請ふ復た説くを止めよ、然れ共木鐸を振て都門學生の間に氣風の指導を爲すもの、卿等を措て又た誰かある、縦ひ當年の粗豪なきも、想に又た實々落々の風、時に激せば一脈の眞血、澆て以て都門の文弱氣死漢を振作するに足らんや、校友會雜誌第五十四號の寄贈を受く、通讀の際一評を試むるを得ん、

卷首に中邨秋香氏の「紀元節講演」あり、國史に記載なきも、國史記載の表によりて、自ら明に知らるる事柄に就て、皇祖の盛徳を奉頌せるもの、事實に感慨を寓したる極めて簡單の講演なり、論說中、末唐恭二氏の「方程式幾何學」は文義簡